

全海運所属組合の横顔 連載 第6回 九州地方海運組合連合会

【組合の概要】

事務局 〒812-0013

福岡県福岡市博多区博多駅東 2-10-13

芙蓉ビル 3階

電話 092-483-6785 FAX 092-483-6787

JR博多駅筑紫口下車徒歩5分

理事長 原田勝弘 芙蓉海運(株)代表取締役社長

事務局長 山口茂樹 専務理事

事務局員数 男子2名(事務局長含む)、女子1名

組合員数 登録運送事業者 110社

届出運送事業者 8社

登録貸渡事業者 207社

届出貸渡事業者 1社

利用運送事業者 80社

合計 406社

所属船腹量 貨物船 352隻 342,367総トン 567,252重量トン

油送船 13隻 7,568総トン 11,258重量トン

曳船 7隻 921総トン 14,000重量トン

舁台船 4隻 1,172総トン 1,954重量トン

バージ 27隻 39,292総トン 66,187重量トン

プッシャー 28隻 3,159総トン 5,561重量トン

合計 431隻 394,479総トン 666,212重量トン



事務局のある福岡市 (Yahoo! map)



九海連の入居する芙蓉ビル(右)と九州運輸局(左)、中央は旧庁舎

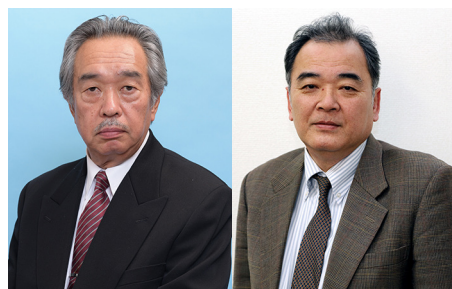


事務局

全海運の最大組合

【組合の組織】

九州地方海運組合連合会は略称・九海連と呼ばれ、九州運輸局管内の九州全土(沖縄を除く)及び山口県西の宇部地区海運組合を含め、傘下の地区海運組合数は8県にまたがる17の地区組合で構成さ



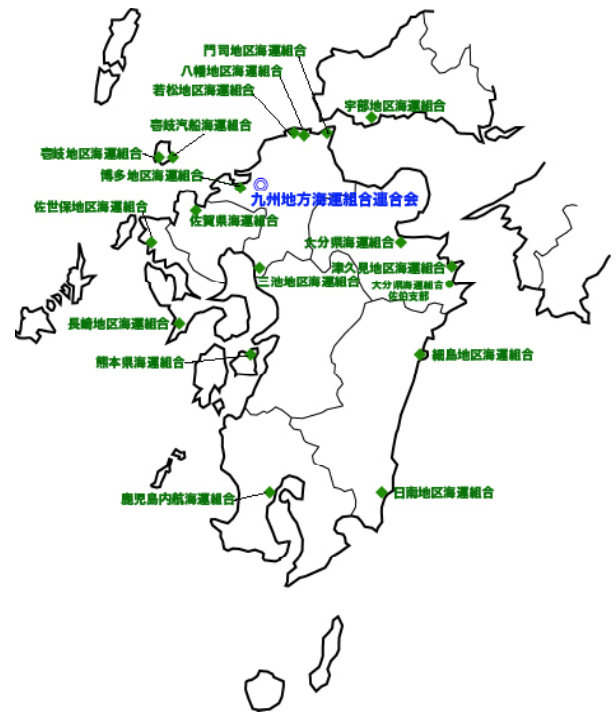
原田会長(左)と山口専務理事

れる。中国地方海運組合連合会（中海連）、四国地方海運組合連合会（四海連）と並ぶ全海運御三家のひとつで組合員数、所属船腹量（ト）数ともに首位の座にある。山口県下では、行政区々分から宇部地区海運組合が九海連の地区海運組合となり、山口県内航海運組合（周南市／徳山、柳井地区、その他）が中海連の地区組合となっている。

九海連代表者の原田勝弘会長（芙蓉海運(株)社長）は、地区組合の鹿児島県内航海運組合理事長でもあり、全海運の副会長、日本内航海運組合総連合会理事もつとめている。山口茂樹専務理事は九州運輸局出身で平成27年に就任した。

九海連は昭和33年5月8日、小型船海運組合法（昭和32年10月施行）に基づき九州地方機帆船組合連合会を母体として設立された。設立時には所属組合数11組合、事業者数1,989社、船腹量1,915隻、124,249総ト、251,461重量ト（全て木船）であった。その後、九州各地で組合が設立され、九海連の組織は拡大し、ピーク時の所属組合数は福岡県9組合、大分県7組合、熊本県6組合、長崎県5組合、鹿児島県4組合、宮崎県2組合、山口県2組合、佐賀県1組合の計36組合（47年4月1日現在）だった。

九海連はその後、他地域同様に慢性的な内航海運業界の不況と諸施策実施等により、近隣の小規模地区組合が統廃合し、平成15年以降は半減して17組合となっている。現在の地区組合数を県別にみると福岡県5組合（関門地区海運組合、若松地区海運組合、八幡海運組合、博多地区海運組合、三池地区海運



九海連の所属事業者数と所属船腹量の推移

年月日	事業者数 (休業除く)	所属船腹量			
		隻	総ト	重量ト	
平成21年度 4月1日	509	519	386,616	687,961	
22年度 4月1日	491	496	358,638	650,344	
23年度 4月1日	470	479	367,749	650,100	
24年度	4月1日	455	471	379,274	661,309
	10月1日	451	465	378,014	656,029
25年度	4月1日	444	447	362,016	632,663
	10月1日	431	439	362,658	632,768
26年度	4月1日	423	431	343,404	639,792
	10月1日	423	436	365,105	637,491
27年度	4月1日	417	436	366,989	644,375
	10月1日	409	439	377,657	660,345
28年度	4月1日	403	433	396,319	669,772
	10月1日	406	431	394,479	666,212

九海連地区別所属事業者数と所属船腹量

平成28年10月1日現在

地区組合	所属事業者数					所属船腹量		
	登録運送業	登録貸渡業	届出運送業	届出貸渡業	利用運送事業	隻	総ト数	重量ト数
宇部地区海運組	5	7	0	0	3	31	102,893	88,662
関門地区海運組	13	11	0	0	4	27	26,288	51,563
若松地区海運組	12	9	0	0	1	37	30,142	61,834
八幡海運組合	2	8	0	0	0	14	30,716	28,700
博多地区海運組	6	6	0	0	13	18	20,225	36,124
三池地区海運組	2	7	0	0	2	9	6,978	15,004
佐賀県海運組合	1	24	0	0	0	31	10,937	32,525
沓岐地区海運組	8	15	0	0	0	23	7,292	23,838
沓岐汽船海運組	3	13	0	0	0	18	5,338	16,897
佐世保地区海運	7	5	1	0	3	12	3,897	18,122
長崎地区海運組	9	4	1	1	3	26	23,840	41,066
熊本県海運組合	9	57	4	0	0	69	23,891	70,690
鹿児島県内航海運	22	8	2	0	38	47	29,062	64,596
日南地区海運組	0	0	0	0	5	0	0	0
細島地区海運組	1	1	0	0	4	2	2,686	4,510
津久見地区海運	5	4	0	0	2	20	46,414	50,674
大分県海運組合	5	28	0	0	2	47	24,880	61,467
計	110	207	8	1	80	431	394,479	666,212

組合)、長崎県 4 組合 (壱岐地区海運組合、壱岐汽船海運組合、佐世保地区海運組合、長崎地区海運組合)、大分県 2 組合 (大分県海運組合、津久見地区海運組合)、宮崎県 2 組合 (細島地区海運組合、日南地区海運組合) で、佐賀県 (佐賀県海運組合)、熊本県 (熊本県海運組合)、鹿児島県 (鹿児島内航海運組合)、山口県 (宇部地区海運組合) 1 組合である。大分県海運組合には支部機能の佐伯事務所がある。

九海連の事務局は、所管官庁の九州運輸局 (海事部門) が関門海峡を望む福岡県北九州市門司区に位置していたため創立以来、同区に長年構えていたが、同運輸局が福岡市博多区移転に伴い、事務所を平成 18 年 7 月に運輸局と隣接する芙蓉ビル 3 階に移転した。JR 博多駅筑紫口下車徒歩 5 分と交通の便がよい。

九海連は事業者数でも他地域同様、近年は減少傾向にある。平成 20 年 4 月 1 日現在では 536 社で、そのうち貸渡事業者が 55.6% の 298 社、運送事業者が 25% の 134 社、取扱事業者が 19.4% の 104 社となっていた。それが 28 年 10 月 1 日現在では組合員数が 406 社で、うち貸渡事業者が 51.2% の 208 (登録 207 社、届出 1 社)、運送事業者が 29.1% の 118 社 (登録 110 社、届出 8 社)、利用運送事業者が 19.7% の 80 社となっている。8 年半で貸渡事業者が 30.2%、運送事業者が 11.9%、利用運送事業者 (取扱事業者) が 23.1% 減少したことになる。

事業者数を地区別にみると最も多いのが 1 県 1 地区組合の熊本県海運組合と鹿児島県内航海運組合の 70 社で、これに次ぐのが大分県海運組合の 35 社で以下、関門地区海運組合 28 社、博多地区海運組合と佐賀県海運組合 25 社、壱岐地区海運組合 23 社、若松地区海運組合 22 社、長崎地区海運組合 18 社、壱岐汽船海運組合と佐世保地区海運組合の 16 社、宇部地区海運組合 15 社、津久見地区海運組合 11 社、八幡海運組合 10 社、細島地区海運組合 6 社、日南地区海運組合 5 社と続く。

所属船腹量は平成 28 年 10 月 1 日現在で前記のように 431 隻、394,479 総トン、666,212 重量トン (m³)。船種別には貨物船が隻数比 81.7%、重量トン数比 85.1% を占めて圧倒的に多く、油送船が同 3.0%、同 1.7%、曳船が同 1.6%、同 2.1%、艀・台船が同 0.9%、同 0.3%、バージが同 6.3%、同 9.9%、プッシャーが同 6.5%、同 0.8% となっている。

これを地区組合別にみると隻数で最も多いのが熊本県海運組合の 69 隻で、これに鹿児島県内航海運組合と大分県海運組合の 47 隻が続き、以下上位は若松地区海運組合 37 隻、宇

九海連地区別船種別所属船腹量

平成28年10月1日現在

地区組合	貨物船			油送船			曳船			はしけ・台船			バージ			プッシャー			合 計		
	隻	総ト	重量ト	隻	総ト	m ³	隻	総ト	m ³	隻	総ト	重量ト	隻	総ト	重量ト	隻	総ト	重量ト	隻	総ト	重量ト
宇部地区海運組合	27	100,130	84,188	2	397	517	0	0	0	0	0	0	1	2,220	3,700	1	146	257	31	102,893	88,662
関門地区海運組合	22	23,332	47,763	0	0	0	0	0	1	240	400	2	1,577	3,156	2	139	244	27	26,288	51,563	
若松地区海運組合	29	24,904	51,345	0	0	0	1	173	2,000	1	270	450	3	4,280	7,133	3	515	906	37	30,142	61,834
八幡海運組合	12	29,895	27,322	0	0	0	0	0	0	0	0	1	720	1,200	1	101	178	14	30,716	28,700	
博多地区海運組合	8	10,246	17,271	0	0	0	0	0	0	0	0	5	9,386	17,809	5	593	1,044	18	20,225	36,124	
三池地区海運組合	8	6,779	14,830	1	199	174	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	6,978	15,004
佐賀県海運組合	29	9,493	30,594	2	1,444	1,931	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	10,937	32,525
壱岐地区海運組合	23	7,292	23,838	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	7,292	23,838
壱岐汽船海運組合	16	4,554	15,033	2	784	1,884	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	18	5,338	16,897
佐世保地区海運組合	9	3,034	9,333	0	0	0	2	390	8,000	1	473	789	0	0	0	0	0	0	12	3,897	18,122
長崎地区海運組合	12	11,486	19,214	0	0	0	2	142	1,350	0	0	0	6	11,293	18,826	6	919	1,616	26	23,840	41,006
熊本県海運組合	53	19,765	61,269	3	1,244	2,306	2	216	2,650	0	0	5	2,462	4,105	6	204	360	69	23,891	70,690	
鹿児島内航海運組合	45	27,922	65,349	0	0	0	0	0	0	0	0	1	122	204	1	18	33	47	28,062	64,596	
日南地区海運組合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
細島地区海運組合	2	2,686	4,510	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2,686	4,510
津久見地区海運組合	19	41,389	44,278	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4,800	6,000	1	225	396	20	46,414	50,674	
大分県海運組合	39	18,460	52,105	3	3,500	4,466	0	1	189	315	2	2,432	4,054	2	299	527	47	24,880	61,467		
計	352	342,367	567,252	13	7,568	11,258	7	921	14,000	4	1,172	1,954	27	39,292	66,187	28	3,159	5,561	431	394,479	666,212

部地区海運組合と佐賀県海運組合 31 隻、関門地区海運組合 27 隻、長崎地区海運組合 26 隻、壱岐地区海運組合 23 隻、津久見地区海運組合 20 隻となり、所属船隻数 1 桁は宮崎県の日南地区海運組合 0 隻、細島地区海運組合 2 隻、三池地区海運組合 9 隻である。

また、トシ数（重量トシ・ m^3 ）でみると最も多いのが宇部地区海運組合の 88,662トシで、これに熊本県海運組合 70,690トシ、鹿児島県内航海運組合 64,596トシ、若松地区海運組合 61,834トシ、大分県海運組憂い 61,467トシ、関門地区海運組合 51,563トシ、津久見地区海運組合 50,674トシが続く。

【組合組織と運営】

九海連には年 1 回の定例総会の他、九州 6 県の代表からなる正副会長会議（構成 6 名）、理事会（同 27 名）があり、運送事業者による輸送部会（同 9 名）、貸渡事業者による船主部会（同 15 名）、砂利船事業者による砂利部会（同 11 名）、R O R O 船事業者による内航 R O R O 船部会（同 5 名）、青年経営者による青年部会（同 22 名）と、貸渡事業者中心に船員問題を扱う船員対策委員会（同 14 名）があり、適宜活発に運営されている。

また、年 1 回、各県持ち回りで研修会が開催され、情報の伝達や交換、組合員同士や事務局同士の意志の疏通も頻繁に図られている。青年部会では中海連や四海連等、他地域の青年部会とも積極的に交流している。

地区別に発展の歴史あり

【九州の海運】

九州は、筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向、大隅、薩摩の 9 国の総称とされ、東西南北津々浦々にそれぞれの歴史文化があり、海運の歴史にも地域の特徴が多々影響して様々な経緯から発展して来たようである。

九州では、江戸時代中期から九州各地で石炭が採掘され、石炭産業の発祥の地と言われている。中でも福岡県筑豊炭田を始め三池炭鉱、佐賀県唐津炭鉱、長崎県北松炭田、松島炭鉱、高島炭鉱、池島炭鉱、宇部炭田等からの石炭の海上輸送で洞海湾、三池、唐津、相浦、佐世保、宇部などの港が栄えた他、石炭積み取り船で博多港、島の産物・海砂で壱岐各港、生活物資の島嶼間輸送や運炭船・坑木輸送船で長崎港、石材・石灰石・木材始め島嶼間への米・雑貨輸送で、天草各港、坑木・甘藷・及び島嶼への生活物資輸送で鹿児島港、米・木材・石灰石で佐伯・津久見港など、飲肥杉の弁甲材で油津港、木材・建材で細島港、輸出入貨物の中継港として関門港などがそれぞれ船の出入りで賑わい栄えた。

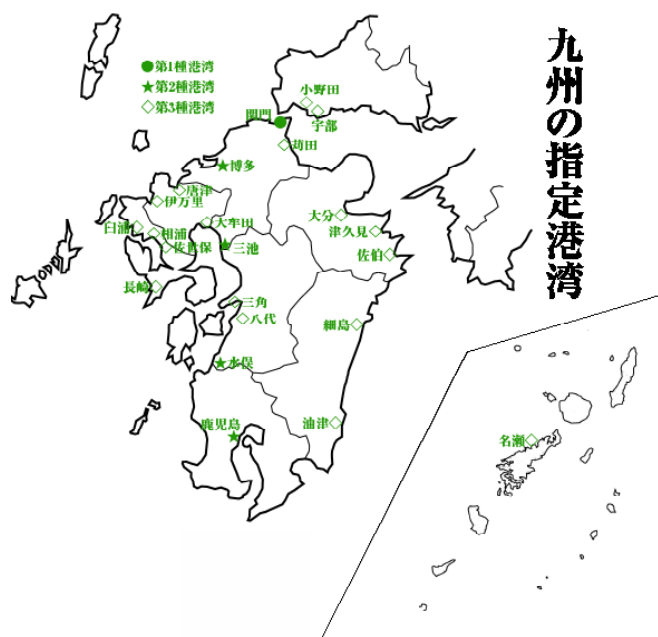
おおまかに第 2 次大戦以降でみると、九州の北部から西部にかけては、石炭産業の隆盛時代に関門港、三池港、唐津港、長崎港などが大いに賑わったが、石炭産業が衰退した後は、積鋼材などの積み荷を求めて瀬戸内海周辺、関西、京浜等の全国各地に出向いていった。九州の北東部から東部、山口県の宇部にかけては、当時から現在でも石灰石、セメン

トを中心に栄えている。南九州は農水産物の他、奄美大島など島々への生活関連物資の他、島々の護岸工事用の砂利・砂・石材等が主流となっていたが、島々の護岸工事も一息入れたようで、一時期のような需要はない。

戦後に地元及びその周辺を中心に稼働していた壱岐、天草地区ではその後、架橋など諸々の事情により需要がほとんどなくなり、積荷をなくした船舶が瀬戸内海周辺、関西、京浜等、全国各地に活動の場を求めている。

九海連エリアには全国の4分の1を占める23の指定港湾があり、内航船の活躍の場が九州一円の広範囲に及んでいる。輸送品目の上位は石灰石、セメント、鉄鋼、石炭・石炭製品、砂利・砂・石材の順となっており、鉄鋼については関門港、大分港、コンテナについては博多港、セメント・石炭については宇部港、穀物では鹿児島港などが主流で、それぞれ地域の主要産業に連動した結果になっている。九州と全国各地の地域間流動をみると、北九州は関東、近畿間の流動が多く、意外なのは同一地域内での流動も多い。中九州は関東、中国地区で特に山口、北九州間の流動が多く、南九州は関東、近畿に向けた流動が多い。

また、地域別の出荷貨物をみると宇部、若松、門司、八幡はセメント、石灰石、鉄鋼、雑貨などの地場貨物があり、内航市場における拠点である他、九州管内は長崎県や鹿児島県など離島が多く点在し、離島住民の生活必需物資の海上輸送にも内航海運が重要な役割を担っている。もうひとつの九海連の特長は、地域的に広範囲にわたっているため、地区海運組合がそれぞれに特長を持っている点である。



【文化と伝承】

九州地方を代表する海上安全の守護神が福岡県にある宗像神社（宗像市田島）と水天宮総本宮（久留米市瀬下町）である。ともに九州だけに止まらず、全国からの参拝者が多い日本を代表する神社でもある。

宗像大社の三女神

宗像神社は、JR 博多から鹿児島本線を快速電車で30分の『東郷』駅下車、バスで10～15分。車の場合は九州自動車道の若宮ICから約20分の距離にある。宗像大社は、あまてらすおおみかみ天照大神の三柱の御子神である田心姫神を沖津宮、みこがみ湍津姫神を中津宮、たごりひめのかみ市杵島姫神をなかつくうへつぐう辺津宮にを祀っており、この三宮を総称して「宗像大社」と称している。

宗像の地は、中国大陸や朝鮮半島に最も近く、外国との貿易や進んだ文化を受け入れる

窓口として、重要な位置にあった。日本最古の歴史書『日本書紀』には、三女神が高天原から筑紫の国・宗像に降りられ、「歴代天皇の政を助け、丁重な祭祀を受けられよ」との神勅（天照大神のお言葉）を受け、ここにお祀りされたことが記されている。地図上で辺津宮から11km離れた中津宮、さらに49km離れた沖津宮を線で結ぶと、その直線は145km離れた朝鮮半島釜山の方角に向かう。古代から半島と大陸の政治、経済、文化の海上路であったことから、海上・交通安全の神としての神威にちなみ、信仰されている。



宗像三宮



宗像大社辺津宮の本殿

また、宗像は『古事記』では胸形という字が当てられたが、胸肩、宗形とも表記されることもあり、元は水滲であったとする説もある。古くから当地の民の氏神として信仰を集めて来たが、神功皇后は夫の仲哀天皇の急死後、体内に後の応神天皇を宿しながらも熊襲成敗に続いて、筑紫から玄界灘を渡り朝鮮半島の新羅を降服させ、高句麗、百済もこれに応じて朝貢を約した。この三韓征伐の際、神功皇后は宗像大社で航海の安全を祈願し、霊験があったことから、以降はことあるごとに宗像神社から朝廷に、献幣使を遣わす習慣になったとされる。大和朝廷から重視され、またこの逸話からも、宗像大社が航海安全の守護神として崇められるようになった経緯をうかがうことが出来る。

宗像神社は近年、海上に限らず陸上・交通安全の神としても信仰を集めており、車に装着する交通安全のお守りは宗像大社が発祥とされている。

近年、沖ノ島を世界遺産にする運動が展開され、平成 21 年 1 月に沖津宮・中津宮・辺津宮及び沖津宮遥拜所と沖ノ島全体を含めて、『神宿る島・宗像・沖ノ島と関連遺産群』の構成遺産として世界遺産暫定リストに追加掲載された。27 年には推薦候補となることが決定し、29 年 7 月に審査される予定である。

水天宮総本宮

水天宮総本宮は、JR 鹿児島本線『久留米』駅下車徒歩 10 分、筑後川の河畔にある。周囲は住宅街で、由緒ある神社らしい門前町の風情が全くない。

社伝によれば水天宮は元々、安徳天皇の母である高倉平中宮に使えた女官の按察使局伊勢が寿永 4 年（1185）3 月の壇ノ浦の戦いに敗れて生き延び、千歳川（現筑後川）の辺り鷺野ヶ原に遁れて、建久初年（1190）に安徳天皇と平家一門の霊を祀る祠を建



宗像大社（左）と水天宮総本宮の海上安全の御護札

てたことに始まる。

大和国石上布留神社(現石上神宮)の神官の娘だった伊勢は、剃髪して名を千代と改め、里々に請われて加持祈祷し、靈験あらたかであったため尊崇者が増え、当初は尼御前神社と称えられた。千代女逝去の後、里人がその墓を営み松を植えて千代松明神と崇め奉った。千代女を祀る奥津城祭(墓前祭)は現在でもし毎年春に奉仕されている。



水天宮は、古来より水の神として農業、漁業、海運業者のみならず、子供の守護神、安産、子授の神としても人々の信仰が篤く、明治天皇誕生の際にも孝明天皇が水天宮に祈誓し、報賽として安産の後には鳥の子餅を献供している。水天宮は明治元年(1868)10月、禁裏御祈祷所(勅願所)にも指定されている。

水天宮の隣接する筑後川流域は、戦場になることが多かったため、戦禍を避けて幾度も社殿を遷したが、慶安3年(1650)に久留米藩2代藩主有馬忠頼から現在の地に社地、社殿の寄進をうけた。

第9代藩主有馬頼徳は文政元年(1818)11月、江戸・三田の藩邸に分霊を勧請、明治4年(1871)に現在の東京都中央区日本橋蛸殻町に遷座されたのが東京水天宮である。この他、筑後地方を始めとして日本全国、ハワイ等各地に鎮座する水天宮はすべて分霊社である。

(次回より九海連所属地区組合の横顔を紹介します)

取材こぼれ話

久留米の水天宮総本宮の創建者である千代女は、肥後国から訪れた中納言平知盛の孫の平右忠を神社の養い後嗣としたが、現在に至るまでその子孫が代々宮司職をつとめている。中でも第22代宮司だった眞木和泉守保臣は幕末動乱期の勤王派旗頭で、王政復古に一生を捧げた先覚者として歴史に名を残し、楠木正成の崇拝者で“今楠公”とも称された。

保臣はまた、国学や和歌などを学ぶが、水戸学に傾倒して水戸藩へ赴き、その影響を強く受けた。この関東遊歴で多くの尊攘派名士と交わり、京都で孝明天皇の即位の大礼を拝観したことから、尊王の志をさらに強くし、藩内で自ら天保学派を立てるだけでなく、同志と計らい藩政改革の建白書を久留米藩主・有馬慶頼(後の頼咸)に上げ、かえって城下から離れた下妻郡水田村に蟄居を命じられ、幽囚生活はおよそ10年に及んだ。



くちなしのや
山梔窩

保臣はその後も尊王の志より強く、天皇の攘夷親政以外にないと唱えて、薩摩藩とともに上洛し、寺田屋事件で幽閉された。その後、長州藩尊攘派とともに禁門の変(蛤御門の変)に主戦派で参画。敗走し天王山(京都・山崎)に籠り会津藩と新撰組に追撃され爆死自害した。享年52歳。

水天宮総本宮の境内には、眞木和泉守一門を奉斎した眞木神社と、眞木和泉守が久留米藩改革で藩より謹慎を命ぜられたときの建物を再現した山梔窩がある。この庵が付近の子弟教育を通じて尊皇、倒幕の策源地ともなったのだった。(水戸出身だけに共感を覚えた中島)